

句仏上人「渋柿」の俳句

岐阜教区 第二組 常貞寺 武山秀隆

今から百年少し前、親鸞聖人の650回御遠忌法要の時の私たち真宗大谷派の門首さまは、彰如上人でした。彰如上人は、「句仏」という俳号で、たくさんの俳句を残しておられました。その中に、次のような俳句があります。

渋柿の やがて渋抜け 日和とも

「この渋柿も、そろそろ渋の抜けていく日和を迎える頃合いでしょうかね。」という意味の俳句です。

柿には、甘い柿もあれば、渋柿もあります。それを人間に例えるなら、どうでしょう。ご自分はどちらの柿だと思われますか？私たちはたいてい、自分のことを渋柿だとは思っていません。甘い柿、あるいはそこそこ甘い方の柿だと思っているのではないのでしょうか？渋柿は、あそこのあの人だよと思っています。

では、仏法という鏡に自分を映してみましようするときと、私もまた渋柿なのだと思います。

この俳句の「渋柿」とは、門徒さま方のことを言っておられます。（これは、句仏上人が歩まれた道をご存じなら分かることですが、）「私、句仏ほど、どうしようもない悪人はいない」という痛々しいほどの自覚です。

句仏上人の別の俳句で、「胡麻は 白き花より出でて 黒きかな」とも言っておられます。黒い胡麻とは、これまたおそらくは、句仏上人ご自身のこと。そして「白き花」とは、ご先祖である親鸞聖人や蓮如上人をはじめとする歴代のお上人さま方のことでしょう。

さて、渋柿は、見た目には甘そうなその皮をむかれた上に、ぐらぐらと煮えたぎる熱湯に数秒間つけられたりします。柿の立場になれば、「やめてくて」と叫びたくなるようなことです。そして、軒下などにつるされて昼の天日と夜の冷たい風に繰り返しさらされま。そして、やがて渋が抜けて、最高の甘みを持つ「干し柿」となります。私たちも、人から立派な人物と見られようとしているその鎧を剥がされ、冷たく思える他力に風に催され、阿弥陀さまの光に照らされていることに気づいた時、ついに弥陀の大信心をいただくことになるのではないのでしょうか。

あなたの渋は、もう抜けていますか？それとも、今まさに渋抜け日和を味わっておられるところですか？